

社団法人日本有機資源協会 会員各位

JORA バイオマス通信 Vol.9

(社)日本有機資源協会がお届けするバイオマスの利活用に関する最新情報です



バイオマスくん
©ochappi/SPiRiTS

<今回のニューズピックス>

行事報告・行事予定 P.2

- ・第61回バイオマスサロン開催のご案内
- ・第8回テクノフォーラム開催のご案内
- ・第13回国内視察研修 東北地域バイオマス活用事例視察のご案内
- ・第1回バイオディーゼル燃料基礎講座のご案内
- ・第62回バイオマスサロン・第9回テクノフォーラム合同開催のご案内
- ・バイオマスエキスポ2011開催のご案内
- ・第6回3R推進全国大会(京都市)開催のご案内
- ・アグリビジネス創出フェア2011開催のご案内
- ・エコプロダクツ2011開催のご案内
- ・食品廃棄物発生抑制・CO2 排出削減セミナー開催のご案内

東京都在住のバイオマスタウンアドバイザーのご紹介 P.7

株式会社森のエネルギー研究所 大野 航輔 氏
「人と自然がつながるところ」



注目のバイオマスタウンご紹介 P.8

岡山県真庭市
「持続可能な資源循環型の産業と暮らしの実現を目指して」



今、注目のバイオマス関連企業をご紹介 P.10

グリーン・サーマル株式会社
「国内初となる山林未利用材を燃料とした専焼の発電所を建設中」



バイオマスマーク取得企業をご紹介 P.11

アルケーウィル株式会社
「バイオマス素材+トウガラシ成分の鳥獣害忌避資材」
～ レイスタープロテックス & ピリピリスティック ～



その他 P.12

- ・第6回リン資源リサイクルシンポジウム開催のご案内
- ・バイオマスタウンアドバイザー支援活動リーフレット
- ・バイオマス活用推進パンフレット
- ・JORA バイオマス通信(Vol.1~8)のバックナンバーについて

東京都在住のバイオスタウンアドバイザーのご紹介

「人と自然がつながるところ」

株式会社森のエネルギー研究所 大野 航輔 氏

■略歴:

2003年3月 早稲田大学 教育学部 英語英文科 卒業
 2005年3月 立教大学大学院比較文明学科 修士課程修了
 2006年7月 株式会社森のエネルギー研究所入社
 2008年 バイオスタウンアドバイザーを取得



■バイオスタウンアドバイザーになったきっかけ:

最終的には、国産材の自給率向上と同時に、持続可能な森林管理と資源利用を行うためです。これは必然的に木質バイオマスエネルギー利用の拡大、ひいては、国内のエネルギー自給率(特に熱分野において)向上にも貢献すると確信しています。

そして、森林資源の供給地となる中山間地においては、歴史的に、森林資源の多様な利用は必ずしも林業として独立しているわけではなく、農業や畜産、あるいは漁業との関連性が濃厚で、いわゆる第一次産業は「暮らし」という観点から捉えれば、すべて繋がっており、本来、一体であると思います。だからこそ、木質バイオマスだけではなく、バイオマス全般について知見を深め、利活用のサポートを行うため、アドバイザー研修に参加しました。

■日常の活動などについて:

株式会社森のエネルギー研究所で、木質バイオマスエネルギーの利用拡大に関する調査、導入支援を行っています。

この仕事の最大の魅力は、全国各地で活動されている木質バイオマスや林業関係者、持続可能な社会を目指す方々と対面し、ともに方向性や実施方策について考え、時には議論を行いながら、働けることです。将来の目標に対して、アプローチの仕方、方法は様々ですが、目標を共有しているということは、既に仲間、同志であると感じてなりません。この分野で活動されている先輩諸氏からは、学ぶことが非常に多く、今後も冒頭で申し上げた目標に向けて、切磋琢磨、自己研鑽をしていきたいと思っています。

そうした意味において、鮫川村で行ったバイオスタウンアドバイザー養成研修で、バックグラウンドの異なる研修生の方々と一緒に仕事が出来たことは私にとって財産です。研修時にお世話になった鮫川村の石井さんは、私と同年代でプライベートでもおつきあいがあり、石井さんが家族のために大事に育てている田んぼの田植え、田起こしを手伝わせて頂いたこともあります。こうした経験は、第一次産業に従事する方が何を考え、何を大切にしているのかを感じる貴重な機会となりました。



■今後の活動目標と課題について:

3月11日に発生した地震が、今後の活動目標をより明確にします。それは、エネルギーの自立であり、それを可能にするコミュニティの創造です。地域における産業と暮らしのベクトルを、対立ではなく、限りなく調和させ、これまで外部調達を前提としていた産業構造の在り方から、地域資源をベースとした構造に転換を行う必要があると思います。自然資源の育成、管理、利用が、まず、地域の人々の生業として十分に成立する産業と暮らしを改めて創造しなければなりません。それは地域内でのバイオマス利用率の向上と同義ではないでしょうか。

岩手県大槌町吉里吉里では、被災後、いち早く地域の人々によって復興に向けた取組が展開されてきました。同時に、岩手県遠野農林振興センター深澤氏等による迅速な支援により、薪ボイラーを熱源とする仮設風呂「河童薪の湯」が避難所となっていた吉里吉里小学校に設置されました。私も、NPO土佐の森救援隊中嶋氏とともに現地へ支援に向かい、薪作りや風呂の掃除等を行いました。また、避難者が自ら復興資金を調達するため、被災材から製造した薪を「復活の薪」として販売する取組を開始し、海外からも注文が入りました。薪風呂の運営は当初ボランティアのみで行っていましたが、やがて避難所の方々と共同で行う作業となりました。時に子供達が湯船ではしゃぐ声が響き渡り、時におじいさんが湯船につかる安堵の声で満たされた薪風呂は、7月末でその役目を終了しました。そして今、吉里吉里ではこれまで漁業者であった方々が、チェンソーを持ち山へ入り、材を出しマテリアル、エネルギーとして利用していくことで、新たな生業を立ち上げ、吉里吉里の町を再建しようとしています。豊かな海は豊かな山がつくることを知っている、漁家林家の誕生です。

